

機関番号：13501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730550

研究課題名（和文） 視覚的イメージを活用した音楽鑑賞の指導法開発

研究課題名（英文） The Teaching Method of Music Appreciation by Using Visual Images

研究代表者

小島千か（KOJIMA CHIKA）

山梨大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：80345694

研究成果の概要（和文）：

音楽鑑賞教育において視覚的イメージを関連させて、学習者に分析的で創造的な音楽聴取を促すことを目指した指導法を開発した。それは、学習者に音楽鑑賞に伴って視覚的表現や絵画鑑賞をさせるものであり、その時に用いる教材音源の作成と鑑賞させる絵画の選定を行った。音源は、音楽的諸要素の意識化とポリフォニーの理解を促すもので、その有効性を確認する中で、視覚的イメージを関わらせることの重要性も明らかになった。絵画の選定では、パウル・クレーのポリフォニーを視覚化した作品について明らかにし、音楽鑑賞に関連させる視点や作品を提示した。

研究成果の概要（英文）：

In developing teaching methods for music appreciation I seek to have students connect visual images to analytic and creative listening. Students draw while listening to sound sources that I have made and appreciate paintings that I have selected. Students are led to feel musical elements and understand polyphony through sound sources. The importance of visual images becomes clear if students wish to feel musical elements and to understand polyphony. I have shown how the pictorial polyphony of Paul Klee is related to music appreciation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：各教科の教育

1. 研究開始当初の背景

音楽鑑賞指導に「視覚」を関わらせることは、実践に基づいた研究の中で多く行われてきている。それらは、音楽鑑賞に伴って学習者に視覚的な表現をさせるものと、鑑賞曲に関連する絵画を関わらせるものとに分けら

れる。筆者は、大学の一般教養の授業の中で、この二つの内容の両方を取り入れていたが、それは、先行研究にない独自の観点で、学習者に音楽の諸要素を意識化させ、音楽の理解を促すものとして視覚的表現や絵画を用いていた。

音楽の諸要素と視覚の結びつきは、様々な芸術家も示しているが、楽器の音色や和声や調性と色彩、旋律と線、旋律や音楽の構造と形、というような結びつきが考えられる。そこでこのような、色彩・線・形といった音楽の諸要素と結びつきやすい造形要素で、音楽の視覚的イメージを学習者に描かせることは、音楽的諸要素の意識化と音楽の理解を促すと考え、それを指導と評価に生かす実践研究も行っていった。この時に用いる音楽は、仕組みが構造的で視覚と結びつきやすいポリフォニーである。

絵画を用いることに関しては、パウル・クレーのポリフォニーに着想を得た作品を用い、大学生自身の視覚的表現と比較させていた。

2. 研究の目的

これまでの実践研究をふまえ、小・中学校の音楽鑑賞において視覚的イメージを関わらせることによって、学習者に分析的で創造的な音楽聴取を促すことを目的とした指導法の開発である。具体的には、以下の二点である。

(1) 大学授業では、J.S. バッハの《4声のカノン》を鑑賞曲に用いていた。小・中学生を対象とした指導法を確立するにあたり、音楽的諸要素が混ざり合った既成楽曲の鑑賞の前後に用いるものとして、一つ一つの音楽の要素の特徴を感じ取らせ、ポリフォニーの理解を促すための教材音源を作成することである。平成20年告示の新学習指導要領では、「共通事項」が新設され、その中で「音楽を形づくっている様々な要素(例えば、リズム、旋律、強弱、速度、音の重なりなど)の働きが生み出す雰囲気やよさを感じ取ること」が重視されている。しかし、音楽の要素には様々な種類とレベルがあり、「どの要素によってどう感じたのか」を自分自身が認識したり、他者と共有・比較することが難しい。作成される音源は、それを聴きながら、視覚的イメージを描かせることにより、学習者に音楽の諸要素の意識化やポリフォニー音楽の構造理解を促すものである。

(2) 音楽に影響を受けた作品を残している画家は多くいるが、パウル・クレーほど音楽の内面的・構造的な部分から影響を受けた作品を残している画家は他にいないと考える。そこで、クレーの音楽に関わる絵画を全て集め、傾向や内容で分類し、特にポリフォニーに関わる絵画に関しては特徴や技法で分類し、彼のポリフォニーに関する絵画の資料を作成する。さらにその中からどの作品を授業でどのように用いるかを検討し、実際に授業で用いる。

3. 研究の方法

(1) 授業実践の中での実態把握

音楽と視覚的イメージの関係をより明らかなものとするために、大学の一般教養の授業において、音楽鑑賞時の視覚的イメージの言語表現を録音し、分析した。これは、毎回の授業の中で、受講生に音楽鑑賞時に視覚的表現をさせ、できた作品をグループで見せ合って話し合いをさせ、その録音と分析である。これにより、様々なタイプの音楽がある中で、ポリフォニーが、音楽の諸要素と関連のある視覚的イメージとより結びつきやすいことが明らかになった。また多くの学生が、管楽器の音色の違いを把握することが困難であることが明らかになり、その点を考慮して、音源の作成を行うこととなった。

(2) 音源の作成

以下の(a)(b)二種の教材音源を作成した。

(a) 音楽の諸要素の特徴を学習者が感じ取り、意識化するためのもので、様々な楽器のソロ演奏によるものである。プロの演奏家の友人に演奏を依頼して、本学内のスタジオでレコーディングした。

(b) 多くの楽器アンサンブルによるポリフォニー(フーガ)の演奏で、本学の音楽科教員や学生に演奏を依頼し、筆者自身もチェロを担当し、本学内のスタジオでレコーディングした。

(3) 文献調査と考察

パウル・クレーと音楽の関わりや、彼の絵画の中で音楽に関連するものについての文献調査を行った。クレー自身の音楽との関わりや、彼の絵画作品に対する音楽の影響に関する研究のほとんどは海外のものである。それらのうち最新の研究論文もいくつか入手し、クレー自身と彼の作品における音楽性を明らかにした。さらに、クレーの音楽に関する絵画の中でも特にポリフォニーを視覚化したものを分類し、音楽鑑賞授業に関連させた指導を行うことに対する視点や作品を提示した。

(4) 実地調査

クレーの生まれ故郷のスイス・ベルンにあるパウル・クレーセンターでは、絵画と関連したコンサートやワークショップが継続的に行われている。それに参加することにより、研究成果のまとめとしてのレクチャーコンサートのアイデアを得た。また、クレーセンターの資料室には、クレーの全作品に関する細かな情報がパソコンに登録されており、音楽に関連する絵画についての情報を得た。

(5) 教材音源の有効性の確認と絵画の使用

作成した音源を大学の授業や附属小・中学校の授業で用いて、その有効性を確認した。さらに選定したパウル・クレーの作品を用いた。

それは、以下の手順で行われた。

① J.S. バッハの《4声のカノン》を聴かせ、学習者に視覚的イメージを描かせる。

② 作成した教材音源 (a) を用い、視覚的イメージを色彩・線・形といった造形要素で表現させる。

③ 再度、J.S. バッハの《4声のカノン》を聴いて、視覚的イメージを表現させる。教材音源 (a) を使用する前と後では、視覚的イメージに変化があったかどうかを確認する。

④ 作成した教材音源 (b) を用い、フーガを分析的・創造的に聴くことを目指して音楽鑑賞を行う。この時にも学習者に視覚的表現をさせる。

⑤ パウル・クレーの絵画を鑑賞させる。用いた絵画は、以下の研究成果の中で示す6分類の全ての中から選択したものである。

4. 研究成果

(1) 教材音源の完成

以下の (a) (b) 二種の教材音源を作成し、その有効性を確認した。

(a) 音楽の諸要素の特徴を学習者が感じ取り、意識化するためのもので、以下のようなコンセプトで構成されている。

- ・ 同一の旋律を様々な楽器が演奏するもの。
- ・ 同一の旋律において、リズム、旋律、和音、音色、強弱、速度などの音楽的要素の変化をもたせたもの。

用いた楽器は、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、トランペット、トロンボーン、ホルン、ユーフォニアム、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスである。

(b) J.S. バッハの《フーガの技法》第1番を用いて、テーマを様々な楽器が演奏するもので、用いた楽器は、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、トランペット、トロンボーン、ホルン、ヴァイオリン、チェロ、ピアノである。

音源の有効性を確認する中で、音楽的諸要素の意識化やポリフォニーの理解に対する視覚的イメージの重要性も明らかになった。今回は、音源の有効性を確かめるために組まれた授業でしか用いていないため、多くの授業で用いてその効果を確認したい。また、このような意識的に聴くための音源は、改良を重ねて今後も種々作成して行く必要がある。

(2) パウル・クレーの絵画を音楽鑑賞に関連させる視点や作品の提示

まず、音楽の鑑賞と演奏と両方に生涯携わっていたパウル・クレーのポリフォニーに対する嗜好を彼の日記・論文等の著作から明らかにした。パウル・クレーは、絵画の時間性を追究して、ポリフォニーの構造原理を絵画造形に援用した。彼は、ポリフォニーの「いくつかの独立的なテーマの同時性」を絵画において達成するために様々な「重なり」を試みた。その様々な「重なり」がポリフォニーの視覚化であり、彼はそれを絵画的ポリフォニーと名づけ、生涯を通した作品の中に様々な形で表現している。そのことを明らかにし、それらの絵画の分類を試みた。絵画の分類については以下の6分類である。

1) 色彩のポリフォニー

無彩色の重なり、つまり白黒の明暗による絵画と色彩の重なりによるものがある。無彩色の重なりでは、《ろうそくの光に照らされたサイドボード上の時計》(1908, 69)、《小さな寝室の眺め》(1908, 70)、《折りたたみ椅子の子供》(1908, 54)、《明暗研究(画架のランプ)》(1924, 23)等がある。色彩の重なりでは、《カイルーアン(お別れ)》(1914, 42)、《カイルーアンの城門の前》(1914, 216)、《チュニス近郊サン・ジェルマンの海水浴場》(1914, 215)、《動いている大気群》(1929, 276)、《白のためのポリフォニックなセッティング》(1930, 140)等がある。括弧内の数字は、制作年と作品番号である。

2) 面のポリフォニー

クレー自身が「フーガ的」と名づけたタイプの絵画は、相似形態面の模倣的連続による「重なり」から時間を感じる一連の作品である。《赤のフーガ》(1921, 69)、《夢の都市》(1921, 106)、《植物の成長》(1921, 193)等。

3) 色彩と素描のポリフォニー

ここに当てはまる絵画は幅広いと考えられる。色彩と素描がそれぞれ独立した意味を持って構成されている絵画は、比較的初期の絵画から見られる。《破壊と希望》(1916, 55)、《ホフマン風の情景》(1921, 123)、《さえざり機械》(1922, 151)、《ポリフォニックな建築》(1930, 130)等。

4) 点描法によるポリフォニー

「いわゆる点描法」とクレーが述べている方法を用いた絵画で、彼の絵画的ポリフォニーはここで理想に到達したとされている。それは、色彩矩形のテーマと点描のスクリーンで構成された色彩テーマの重なりから成る。独立した2つのテーマが存在し、しかし画面の中でそれらは溶け合っている。《ポリフォニー》(1932, 273)、《アド・パルナッスム》(1932,

274)、《光と尖鋭》(1935, 102) 等。

5) 線的ポリフォニー

クレーの芸術にとって線は重要な要素であり著作の中で「能動的な線」「中間態の線」「受動的な線」を示している。能動的な線は自由な線で、中間態の線は始まりも終わりもない閉じた線で、受動的な線は面を形成するためにあるような線の性質が台無しになったものである。このうち能動的な線、中間態の線を用いた絵画的ポリフォニーがある。中間態の線によるポリフォニーといえる作品は、1本の連続線で描かれており《二つ目のスケッチ、エキゾチックな響き》(1930, 37)、《嘆き》(1934, 8) 等がある。

6) 物質的ポリフォニー

布や新聞紙等が重ねられたものや、2枚の絵が重ねられた《ガラスのファサード》(1940, 288) 等がある。

パウル・クレーの絵画的ポリフォニー作品に対する上記6分類の提示は、本研究の成果の大きな一つである。この分類の妥当性は、今後、彼の音楽的作品を全般的に文献調査していくことにより明らかにしていきたい。

音楽鑑賞に絵画を関連させる視点としては、以下のように考える。

音楽の要素は、音楽の進行と共に表れては消え、楽曲の構造は、聴き終えた時点でしか捉えることができない。一方、絵画鑑賞は最初に目にした時に全体が見渡せ、音楽鑑賞と逆の行為を行うことになる。つまり「重なり」を視点として、クレーの絵画的ポリフォニーの鑑賞を音楽鑑賞に関わらせることは、学習者にポリフォニーの構造を理解させる一助となり、更に音楽構造を捉えることの意味を問い直させることにつながる。

以上の考えの下に、上記6分類の絵画的ポリフォニー作品を、実際に授業で用いてみたが、その使用方法については、今後の検討の余地がある。

(3) ポリフォニー音楽と絵画のテクチャーコンサート

本研究のまとめとして、地域の方々に呼びかけて、ポリフォニーの演奏とレクチャー、及び絵画ワークショップの会を実施した。演奏曲目は、J. S. バッハ《ゴルトベルク変奏曲》の弦楽三重奏版である。この曲はアリアと30の変奏から成るが、その中からカノンやフーガでできているものを8曲演奏した。原曲は鍵盤楽器のためのものであるが、音の重なりが聴覚的にも視覚的にも分かりやすいように弦楽三重奏の演奏にした。

参加者には、《ゴルトベルク変奏曲》を一回聴きいただいた後、再び聴きながらそのイメージを様々な色紙を切り貼りして「重なり」として表現していただいた。最後にパウル・クレーの絵画的ポリフォニーに関してのレクチャーを行った。この活動の参加者に対するインタビューからは、音楽を創造的に聴く一助として視覚的表現を関連させることは、老若男女を問わず、有効であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①小島千か、(2011)、「音楽鑑賞授業における音楽構造の理解—パウル・クレーの絵画的ポリフォニー作品との関連を通して—」、『教育実践研究』(山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要)、No. 16、pp. 22-37、査読無

②小島千か、Visual Representation of Polyphony: Its Use in the Teaching and Assessment of Music Appreciation 多声音楽の視覚的表現—音楽鑑賞の指導と評価におけるその使用—、『教育実践学研究』(山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要)、2010、No. 15、pp. 134-143、査読無

[学会発表] (計2件)

①小島千か、音楽鑑賞時の視覚的イメージとその言語表現—大学での授業実践を通して—、日本音楽表現学会 第7回大会、宮城教育大学、2009年6月14日

②Chika Kojima, Graphic Representation of Musical Elements: Its Use in the Teaching and Assessment of Music Appreciation, 28th World Conference of the International Society for Music Education, Bologna University, July 21, 2008.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小島千か (KOJIMA CHIKA)
山梨大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：80345694

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし